

ねじりはちまき

4月 卯月(うづき) 清明 穀雨の月になりました。

4月4日清明です。6日～15日まで春の交通安全運動です。20日穀雨です。

29日昭和の日。昭和天皇のお誕生日です。

穀雨は二十四節気の一つで、この日から立夏までの期間をいいます。清明から数えて15日後になります。この時期は春雨の降る日が多く、穀物の成長を助ける雨と言う意味から穀雨といいます。暖かい雨で田畠が潤い、種をまくのにちょうど良い気候です。また、このころに降る長雨は菜種梅雨と呼ばれています。穀雨の終わるころに八十八夜が来ます。立春から数えて八十八日目です。歌にもあるように、夏が近づきますが寒い日もあります。

お体には十分ご自愛ください。

幸田 常一

<会社近況>

4月に入りました。暖かくなりましたね。チュウリップやパンジーが玄関を賑わせてくれています。良い季節になりました。

現場では、本宮市の住宅修繕工事が完了したところです。現在、二本松市の住宅修繕工事をお世話になっております。事務所内では見積書の作成や図面の作成などを行っています。

4～7月は、シロアリの活動時期なので、羽蟻を見つけたらシロアリか普通の蟻か確認しましょう。廃材や薪、家具などの木材がうちの周りに立てかけられていたりすると、シロアリの格好の餌になるそうです。

木材を持ち上げるとシロアリがいる場合など珍しくありません。シロアリやそれによる被害を見つけたら、被害の大小を問わず、お気軽にご相談下さい。

4月『旬』

草花が芽吹き、旬の美味しい食材を初物として見かけるこの頃です。まずは、タケノコ。炊き込みご飯にしても、そのまま焼いても、スープにしても美味しい万能食材です。食物繊維が豊富で便秘予防にも良いですし、アスパラギン酸が疲労回復に役立ってくれるそうです。続いて、あさりも旬です。こちらの食材も万能選手で、お吸い物や、炒め物、炊き込みご飯も良いお出汁ができます。旬のものだと身がふっくらして美味しいそうですので、食卓を春色に彩ってくれそうですね。

令和3年4月5日発行

＜後記＞年度が替わり新しい生活が

有限会社 幸田建設

始まります。新たな出会いや、環境に

幸田久美

わくわくドキドキの期待もありますが

〒969-1204

河かと体調を崩しやすい時季でもあります

本宮市糠沢字八幡 1-1

すので、どうか皆様こころも体も健や

電話 0243-44-3816

かに、お過ごし下さい。(ほしの)

* 5月連休のお知らせ

5月2日(日)～5月5日(水)までお休みさせていただきます。

ご不便をおかけいたしますが、よろしくお願ひいたします。

山旅遊人さんの投稿は諸般の事情により
しばらくお休みさせていただきます。

■本誌へのご意見、ご感想など

夢を見続ける男 NO84

良寛のこと

今回は良寛について取り上げたい。最近書斎にある本を整理しようとしたら、良寛に関するものが数冊見つかった。何でこの本を買い求めたのかと、パラパラとめくってみたら、いろんなことが思い起こされた。一時良寛の伝えられる生き様や遺された和歌などに魅かれるものがあって読んだのであった。どうしてあのような生き方ができたものか、不思議でたまらなかった。そこで今回は、良寛にどこまで迫られるかは分からないが、生き様の一部を紹介してみたい。

良寛のこと皆さんはどんなことをご存知だろうか。イメージとして浮かぶのは、子ども達と隠れんぼをしたり、手まりをついて遊ぶ、素朴でやさしい姿かもしれない。確かにそういう側面もあったであろうが、良寛の74年の一生を総括的にいうとこうなる。良寛は曹洞宗の托鉢僧で、師の大忍国仙や高祖道元の教えを守り、生涯寺を構えず、妻子を持たず、物質的に無一文に徹し、心身脱落（身も心も一切の束縛から解放されて絶対的な自由を獲得すること：道元の教え）の境涯を貫いたのであった。なぜ、こういう生き方を選んだのであろうか。また、できたのか。

先ず、生い立ちからみてみよう。生まれは江戸時代の宝暦8年（1758年）で、今の新潟県出雲崎町の地である。生家はその在の名主であった。幼名を文孝といい、しかも名主の跡継ぎで

あったから、幼少のころから近在の寺子屋に通い、学ぶ機会が得られた。昼行燈といわれる性格だったが、とにかく本が好きで読書に耽っていたようだ。15歳になり、名主見習いになるが、我欲をむき出しにした人々のいがみ合いが多々あり、仲裁もままならず、自分は実務家として名主に適さないと、弟に名主を譲って出家してしまったのである。それは18歳の時であった。

出家先は、隣接の地にある光照寺（曹洞宗）であった。実はこの光照寺の寺子屋に文孝は通っていたのである。その縁で住職から出家も許されたのである。ここで禅修行が始まった。やがて光照寺での4年の歳月が流れて22歳の時である。住職の薦めで備中（岡山県）・玉島の円通寺の大忍国仙老師の下へ赴くことになる。そこで得度を受けて良寛の名を授けられ、円通寺での新たな修行が始まる。ここで禅寺の修行とはどんなことをするのか、それをみてみようと思う。

修行としての日課は江戸期と現代では全く同じかは分からぬが、基本部分は伝統が守られているものと思う。ただ、インターネットで調べると、スケジュール面では時間の設定や回数が禅寺によって異なるようだ。修行の基本となるのは、座禅や勤行（読経）でそれに時間が割かれる。座禅は、朝・昼・晩の3回と、5時間に及ぶところもある。その外に師との関係で禅問答や講義がある。また、重視されているものに作務がある。これは午前・午後の2回行われるが、雑巾掛けの掃除であったり、境内での各種作業であったりする。勿論食事も3回あるが、質素である。禅寺では「日課のすべてが修行」である。食事や作務も含め、すべて「作法」がある。朝起床（4時頃）して、夜就寝（9時頃）まで、一つ一つの行いが作法に則ることが求められるのだ。

時を遡れば、修行僧は薪作りや飯炊きもしたことであろう。その時に師からこう教えられたという。「薪作りの時には、薪作り三昧（ざんまい）、飯炊きの時には飯炊き三昧。その都度のことに、なりきるんじや。それが仏道なんじやよ」と。心のありよう、向きようが常に問われている。

円通寺での良寛は、師から借り受けた道元の「正法眼藏」を精読してから変わったという。道元禪師の一言半句を、まるで鏡に照らし合わせるが如く、日常生活の中で忠実に行じたのだ。その道元禪師の教えに、菩薩の四つの行を説いた「四摄法」があるが、その内良寛は特に「愛語」を、自らの戒めとし、生涯堅く実践したと言われる。「愛語攝」は、人々

にやさしい、いたわりの言葉をかける実践である。この「愛語」を托鉢する中で実践し、多くの人々に慕われたのだ。

良寛33歳の時、円通寺の国仙老師が亡くなった。良寛は各地の名師、高僧を尋ねて、行脚にてることにする。行脚は、野宿覚悟の厳しい遍歴である。こうして各地の諸宗派の奥儀を尋ね、良寛は後年「雑炊宗」と呼ばれるまでの融通無碍の仏教を体得してゆくのである。

行脚の日々を送る中、寛永7年（1795年）父の死（京都で入水自殺）を知る。京都での父の法要に出向き、弟から実家の状況を聞かされる。そこで良寛は帰郷の決意をする。実家に対して、今の私は何もしてやれないが、せめて近くに在って見守ってやる、私にできる精一杯の勤めをしようと、思ったに違いない。そして郷里・越後へ帰郷の旅路に就く。17年ぶりである。

帰郷といつても実家の近くには住まず、少し離れた郷本海岸の空庵（塩炊き小屋）に入る。ここで托鉢と庵の生活が始まる。良寛39歳の時である。現代の我々としては、衣食住をどうしていくか、心配が先だってしまうが、良寛はそうではなかった。心のままに、ただひたすら托鉢を行ずるのであった。「喜捨されれば良し、喜捨がなくても良しが、真の托鉢である」の心境である。それは、“喜捨をこれだけ欲しい”という執着を放つ修行でもある。また、先に触れた「愛語」も托鉢先で実践したことであろう。やがて良寛は、托鉢を通してその徳を慕われ、得ての詩文を通してその人となりを理解され、援護してやりたいという人も増えていったに違いない。

余談だが、托鉢には米銭を受ける鉄鉢を持って歩くが、良寛はしおちゅう途中で忘れたらしい。

春の野に董（すみれ）つみつつ鉢の子を忘れてぞ来しあわれ鉢の子
また、鉢の子を忘れさせたものに、里の子ども達との遊びもあった。

此の里に手まりつきつつ子どもと遊ぶ春日（はるひ）はくれずともよし
次々と庵を変えた良寛だが、47歳の時「五合庵」に移ってからは、12年間ここで落ち着く。ここでは自ら土を耕し、種を播き、野菜づくりもしている。

水やくまむ薪や伐（こ）らむ菜やつまむ朝のしぐれの降らぬその間に
良寛の五合庵での食生活を詠った漢詩があるが、それによると食事は、托鉢でいただく米と、おかずはあかざと豆の葉だけで、修行時代以来変わらず、嫌になることはない、としている。

禪門での食事は、生かさせていただこうえでの必要最小限のものでよしとされ、いわば「一汁一菜」に「ごはん（おかゆ）」が基本とされてきたのである。たらふくは食べることはしない。

これが日常だが、良寛を慕う人（詩文や書を習う）から差し入れを受けることもある。

ちむばそ（ほんだわら）に酒にわさびに給わける春はさびしくあらせじとなり
こうして来訪者と酒もたしなむのであった。里人とも季節の野宴を楽しんだようだ。
また、五合庵は「心のサロン」でもあった。良寛の声望がいよいよ高まり、一日会わんと、文人墨客が遠方より訪ね来るようになる。また、若き僧侶が弟子入りを願い出ることもあった。

最後に晩年の良寛に触れておかねばならない。60歳の頃、国上山の麓にある乙子神社境内の空庵に移り住んだ。そこで10年目、良寛70歳の時貞心尼という若い尼僧が訪ねてきたのである。良寛と貞心尼は、当初は「道を語り合う」仲であったが、やがて「相聞（そうもん）」の仲へと転じていく。相互の歌のやりとりを紹介したい。先ず、「道を語り合う」場での歌

良 寛：白たへのころもでさむし秋の夜の月なかぞらにすみわたるかも

貞心尼：向かいいて千代も八千代も見てしがな空ゆく月のこと問はずとも

「相聞の歌」をひとつ

良 寛：又もこよ山のいほりをいととはずすすき尾花の露をわけわけ

貞心尼：立ちかへりまたもといこむたまほこの道のしば草たどりたどりに

良寛はこのように自在の境地で静かに74歳の生涯を閉じた。今回はこれで終わりとする。

山旅遊人の山旅寄稿文 2回目の“ひとやすみ”

自分が本誌『ねじりはちまき』に寄稿を始めたのは平成 21(2009)年 2月
『安達太良山 新年丑年 初山行』からでした。No.62号『安達太良山で
“ひとやすみ”』まで連載しました。その後不定期に日本百名山を中心に書き、
再び連載を復活し、前回の『安達太良山の大展望台 大名倉山』で 100 号と
なりました。これを区切りにここで 2回目の“ひとやすみ”とします。しばらく
は日本 300 名山の残り 40 山を登り切るための準備期間にしたいと思います。
御愛読ありがとうございました。No.101号、寄稿の再開の節はまたよろしく
お願いします。

令和 3(2021)年 4月 山旅遊人

